ときには、幸福

―11―

◇ゴミの時代

松本道介
Matsumoto Michisuke

何でもないことかもしれないが、私は駅のプラットホームにゴミ箱のないのが気になる。いつも気にしているわけではないが、例えば電車を待っていて鼻をかんだあとにちり紙を捨てようとしてゴミ箱のないのが気になる。

駅から消えたゴミ箱

すべての駅からゴミ箱が撤去されてからもう十年くらいになるのに、その前の何十年かはプラットホームのどこかにゴミ箱のあることに馴れてきたせいだろう、いまだに無意識にゴミ箱を探してしまう。そしてゴミ箱が見あたらず、ちり紙を捨てられない小さな欲求不満のなかで私はいつもオウムを思い出す。

オウムの地下鉄サリン事件のあとだったろうか。横浜駅あたりのゴミ箱から白い煙が立ちのぼり、近くにいた何人かの人が目を痛めて病院へ行くという事件が起きた。それがオウムにかかわる事件だったのか、オウム〝便乗〟のいやがらせだったのかはよく覚えていないが、事件以後あらゆる駅のプラットホームや構内からゴミ箱というものが姿を消した。当時はゴミ箱のないのが、何か当座のことのように思っていた。地下鉄サリン事件という前代未聞の大事件のあとだったからすべてのゴミ箱撤去もやむをえない、オウムの幹部もつかまり裁判も始まるから半年か一年すれば、駅のゴミ箱は復活するのだろうと多寡をくくっていた。だが、ゴミ箱は一向に復活する気配はなく、そのまま十年がたってしまった。

ゴミ箱廃止十年となると、ほとんど〝歴史〟と呼んでもいい事態だが、そんな話を知人にしたら、つい最近ＪＲで透明なゴミ箱を開発してプラットホームに置きはじめたという話を聞いた。新しいゴミ箱を私はまだ見ていないが、もしこれが私鉄にもひろまるならまさにゴミ箱の復活であり、これまた〝歴史〟の一頁ともなる事態のような気がしてきた。

昔はゴミ置き場もなかった

あまりゴミ箱の話ばかりしていると、妙な趣味の持ち主として嗤われかねないが、私のこだわりは特に変わったこだわりだとは思わない。それどころか私はこの五十年の歴史をかえりみて、大真面目にゴミの時代と呼びたい人間なのである。そして現代がゴミの溢れる時代だからこそ、一番ゴミの多く出る場所のひとつである電車の駅にゴミ箱のないのが奇妙に思われて仕方がないのである。

私が現代をゴミの時代だと見ているのは、

ひとつには昔をよく思い出す年寄だからだ。ゴミの存在しなかった昔をよく思い出す年寄だからだ。いくら昔だってゴミはあったろうにと言われれば、たしかにゴミはあった。しかし五十数年前になる私の高校生時代、家の近所にゴミ置き場はなく、ゴミの収集車がくることがなかったのもまたたしかなのである。

生ゴミはあったが、時折庭の隅に穴でも掘って埋めればすんでいた。プラスチックなどというものはまだなかったから〝燃えないゴミ〟は存在せず、その他のゴミは風呂を焚くさいに焚き口から放りこんでおけばすんでいた。今では自宅で風呂を焚く家などないだろうが、昔は自宅で焚くのがふつうであり、薪割りは若者の仕事であった。

そんな時代を少しでも思い出してみると、現代のゴミはすごい。一家のゴミ出し係はたいてい亭主の仕事ときまっているから、私もご多聞にもれず週に四回つとめている。内訳は生ゴミが二回、燃えないゴミ一回、あとの一回は新聞雑誌から罐や壜のたぐいだが、三人家族で格別のぜいたくはしていないつもりなのに、毎回かなりの重さのゴミをかかえて五十米ほどの道を歩く。

捨てるために生きている…

どうしてこれだけのゴミが出るのかといえば、毎日ものを買うからであり買わされるからである。しかもそれをまるで流れ作業のように処理して捨てていかなければ家の中はたちまちモノで溢れてしまう。したがって出来るだけ早く捨てていかなければならない。食べものなど半分食べただけでも、雑誌や本であれば数頁読んだだけでも、あるいはまったく読んでいなくても捨てていくという具合で、まるで捨てるためにものを買う時代、いやもっと言えば捨てるために生きているような時代になってしまった。しかしＧＮＰという観点から見れば、このような状況こそ一番望ましい状況ということになるのだろう。

これに対し、昔のようにものを買わず、ものを捨てない時代にはＧＮＰつまり経済成長などとても望めない絶望的な時代だった。なぜものを買わなかったのか、当然のことながらお金がなかったからだが、なぜ捨てなかったかと言えば、ものを大切にして長く使うのが美徳だったからという気がする。

つましい生き方

美徳と言っても別に学校で習うたぐいの美徳ではなく、むしろ人間の生きかただったような気がする。とりわけ私の母たちの世代などいかにもつましい生きかたをしていた。つましいというのは、つつましいとよく間違えられ、今や死語になりかけている言葉である。〝つつましい〟は包むから来ており、〝つましい〟は摘むから来ている。つましいとは無駄を摘むことであり、今から思うとなにか清々しさの感じられる生きかただった。

ものを買えば出来るだけ長く使い、滅多に捨てることをしなかった。デパートの包装紙などもきれいにたたんで取っていた。今から思うとなぜあんなものを捨てないでいたのか不思議だが、あえて言うなら、ものをつくった人への敬意だったような気がする。ほとんどのものは誰かが心をこめて手作業でつくったものであり、右から左へぽいと捨てるわけにはいかなかったのである。それに較べると今はすべてのものが工場で手軽につくられるので右から左へと捨てることになんのやましさも感じないようだ。

（文学部教授）